

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月5日現在

機関番号：62608

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2010～2011

課題番号：22820083

研究課題名（和文） 近世公家文化の成立・展開・流布に関する基礎的研究

研究課題名（英文） Basic research on formation, development and dissemination of kuge culture in early modern period

研究代表者

西村 慎太郎 (NISHIMURA SHINTARO)

国文学研究資料館・研究部・准教授

研究者番号：90383546

研究成果の概要（和文）：

近世の公家文化について、その家職がどのように民間社会に流布・展開を明らかにすることを目的とした。第一に近世公家家職の全体的な展開過程を分析し、そもそも公家の家職も中世・近世の中で様々な展開や創生されていることが明らかになった。次いで、近世公家家職そのものを理解しなくてはなぜ民間社会に流布し得たのかの分析が不可能であると思い、家職を総合的に研究した。第二に公家家職の中でも近世になって再発見されて幕末に飛躍的に民間社会と結合していく四条流庖丁道の具体相を研究した。四条流庖丁道は近世後期に秘伝と由緒を作り、幕末には大坂・兵庫・京都などに多くの門人を獲得するに至った。

研究成果の概要（英文）：

The primary purpose of this research project for FY 2011 was to examine how family professions in relation to kuge culture disseminated in civil society in early modern period. First, I analyzed the process of the development of kuge family professions in a wider scope, and demonstrated varied ways in which they emerged and developed in medieval and early modern periods. Then, having realized that it is impossible to understand how such professions spread in civil society without knowing more about early-modern kuge family professions themselves, I conducted a comprehensive survey on kuge family professions. Second, I examined the Shijo-ryu hocho-do (Shijo-ryu cuisine), which had been re-discovered in early modern period and become increasingly popular in civil society at the end of the Edo period. The Shijo-ryu hocho-do established its own arcana and tradition in late early modern period and had many students in such places as Osaka, Hygo and Kyoto at the end of the Edo period.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	950,000	285,000	1,235,000
2011年度	760,000	228,000	988,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,710,000	513,000	2,223,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学、日本史

キーワード：天皇・公家・家職・有職故実

### 1. 研究開始当初の背景

これまで近世の天皇・朝廷に対する人びとの認識について、近世後期以降、権威化が進み、明治維新に向かっていったと評価されてきた（とりわけ近世思想史など）。これまで公家身分の中でも比較的低い階層に位置付けられる地下官人に任命されようとする町人・百姓の動向を研究してきて（拙著『近世朝廷社会と地下官人』吉川弘文館、2008年）、一面では正しいが、そのような発展的な評価では予定調和に過ぎず、文化・思想的な動向を念頭に置いた研究が不可欠であると考えてきた。

### 2. 研究の目的

近世の天皇・朝廷に対する同時代人の認識について、具体的な天皇・朝廷認識についてはなお検討すべき多くの課題が遺されている。近代天皇制国家がどのように生まれたのかという、発展段階論的な議論ではなく、近世固有の意識として、人びとによる天皇・朝廷への眼差しを追求する必要が欠かせないものと思われる。

そこで、天皇・朝廷と人びととの接点として、公家文化を想定し、公家文化の諸動向や公家ではない人びとが何を受容し、その学知をどのように伝播させていったのかを明らかにしたい。なお、公家の文化は「家の技」「家職」「家業」として公家の家に伝来する（後に述べるように、伝来してきたと由緒づけられる）ことが多く、公家身分を検討する上でも重要であるものと思われる。

### 3. 研究の方法

公家文化に関するネットワークの形成と伝播、秘伝の形成をさぐるために、公家家職のひとつである入木道と庖丁道、あるいは有職故実全般を中心に史料を分析していくことにした。その他、公家家職の全体像を明らかにするため、家職に関する記録類の分析も行った。

具体的には入木道の場合、東京大学史料編纂所及び国立公文書館に所蔵されている持明院流入木道の門人に関する文書を分析し、門人層形成の様相を明らかにした。他方、堂上公家の持明院家に門人の申請を行わず、持明院流入木道を学んだ動向として、飛騨高山の国学者田中大秀を分析し、持明院流入木道の秘伝が持明院家を経ずに「氾濫」していることを明らかにした。この点については持明院家の門人であった姫路藩主酒井忠以の日記『玄武日記』より「氾濫」の実態について明らかにした。

庖丁道については、宮内庁書陵部所蔵の堂上公家四条家の文書と慶応義塾大学図書館魚菜文庫所蔵御厨子所預高橋家記録類を分析した。高橋家は近世初頭より門人を形成していたが、四条家は近世後期に秘伝や由緒を創り上げていったことが明らかになった。

### 4. 研究成果

公家の文化についてはこれまで国文学や文化史の中で語られることが多く、近世天皇・朝廷研究で位置付けられることが少なかった。家職論としての検討は盛んであったが、身分制との関係からこぼれ落ちる「文芸」の側面については捨象されてきた。

今回の研究によって、一部の公家の文化は中近世のある段階で意図的に創り上げられたり、再発見・改作などの過程があったことを明らかにした。四条流庖丁道の場合、中世段階の庖丁に関する技芸をもった当主を発見し、近世後期に家職として秘伝と由緒を創り上げて行った。この際、四条家当主が自ら行ったのか、周囲の人びとが創り上げて行ったのかは今後の課題であるが、京都の任侠大垣屋清八との関係が確認できた。大垣屋清八の養子大澤善助の回顧録『回顧七十五年』にも賭場のひとつとして四条家が挙げられており、公家家職とアウトローな社会との関係が垣間見られた。これらの点について 2010 年 11 月 17 日の国文学研究資料館研究懇話会にて報告を行ない、『宮中のシェフ、鶴をさばく 江戸時代の朝廷と庖丁道』（吉川弘文館、2012 年）を執筆した。

持明院流入木道の場合、戦国時代に家職を認識し、豊臣政権～江戸時代初期の段階で門跡・公家層の門人化が進み、やがて近世後期には大名・幕府役人・藩士・町人などが門人となっていくというように、家職のターゲットが変化している。しかも 19 世紀以降、爆発的な門人が形成され、持明院家の経営の柱になっていった。但し、その「秘伝」は持明院家に十分に伝わっておらず、江戸の門人であり、多くの人物が師事した旗本森伝右衛門尹祥から「逆輸入」される様相も明らかにした。

なお、今回の研究では持明院家に提出された入木道門人誓詞の分析も行ない、門人層の様相を検討した（東京大学史料編纂所蔵写真帳）。持明院家の入木道門人になった人物は永正 6 年 9 月 23 日に誓詞を提出した「房広」（詳細は不明。また、実際に持明院家へ提出されたのかも不明）から明治 3 年 4 月 25 日付の武蔵国多摩郡府中宿本町に居住してい

た原田晋之助による誓詞まで、合わせて 292 名が確認できた。

また、公家文化の「秘伝」が公家の手から離れて「氾濫」している。実際、姫路藩主酒井忠以の場合、他見を禁じられているにも関わらず、持明院流入木道の秘伝書を家臣が列座する中で閲覧させている（『玄武日記』天明 3 年 8 月 1 日条、東京大学史料編纂所蔵）。但し、酒井忠以は他の公家文化も享受しており、持明院流入木道を特別視しているわけではなく、大名の文化動向のひとつとして考えられる。以上の持明院流入木道については、「近世持明院入木道に見る公家家職—その成立と「秘伝」の伝播」（『東京大学史料編纂所研究紀要』20、2010 年）と「公家家職から見た天皇制 入木道という家職のあり方」（荒武賢一朗編『近世史研究と現代社会 歴史研究から現代社会を考える』清文堂、2011 年）を発表した。

有職故実の動向について、門跡寺院の肝煎を務めた非蔵人松尾家の文書を分析した。非蔵人が上皇の意思を受けて文化的力量をもって門跡寺院の経営にコミットすることが明らかとなり、「近世非蔵人の門跡肝煎 一靈元院政期の梶井門跡を事例に—」（『日本歴史』756 号、2011 年）を執筆した。また、松尾家文書の調査の過程で天皇即位礼に関する文書があり、そこから「近世後期の即位儀礼をめぐる動向」（『近世の天皇・朝廷研究』3、2010 年）を執筆した。

公家の文化のある段階での意図的に創り上げ、再発見・改作など、その担い手が公家当主であったり、その周囲の者であったりしたが、今後はどのような契機にどのような主体が意識的に公家文化を形成していくのかについて検討していきたい。今後の課題を明確にするために、近世天皇・朝廷研究の中での位置付けを提起する必要から 2011 年 2 月 6

日東京歴史科学研究会シンポジウム『深谷克己近世史論集をどう読むか』において「近世天皇研究の地平」を報告し、『人民の歴史学』188号に論稿を掲載した。加えて、2011年5月26日のシンポジウム『近世の公家文書と学芸』で報告を行ない、「近世公家家職研究の展望」(『国文学研究資料館調査研究報告』32号、2012年)を執筆した。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計8件)

①西村慎太郎、近世公家家職研究の展望、『国文学研究資料館調査研究報告』、査読無、32号、2012年、25-34頁

②西村慎太郎、鶴をさばく ―四条流庖丁道の展開―、『国文研ニュース』、査読無、23号、2012年、6-7頁

③西村慎太郎、公家家職から見た天皇制 入木道という家職のあり方、荒武賢一朗編『近世史研究と現代社会 歴史研究から現代社会を考える』(清文堂)、査読無、2011年、121-150頁

④西村慎太郎、近世非蔵人の門跡肝煎 ―靈元院政期の梶井門跡を事例に―、『日本歴史』、査読有、756号、2011年、86-102頁

⑤西村慎太郎、近世天皇研究の地平、『人民の歴史学』、査読無、188号、2011年、12-20頁

⑥西村慎太郎、回祿からの再生 ―罹災と公家の記録管理―、国文学研究資料館紀要アーカイブズ研究篇、査読無、第7号、2011年、

1~16頁

⑦西村慎太郎、近世後期の即位儀礼をめぐる動向、近世の天皇・朝廷研究、査読無、第3号、2010年、71~117頁

⑧西村慎太郎、近世持明院入木道に見る公家家職―その成立と「秘伝」の伝播、東京大学史料編纂所研究紀要、査読無、第20号、2010年、59~70頁

[学会発表] (計3件)

①西村慎太郎、近世公家家職研究の展望と課題、シンポジウム『近世の公家文書と学芸』、2011年5月26日、国文学研究資料館

②西村慎太郎、近世天皇研究の地平、東京歴史科学研究会シンポジウム『深谷克己近世史論集をどう読むか』、2011年2月6日、早稲田大学

③西村慎太郎、鶴をさばく ―四条流庖丁道の展開―、国文学研究資料館研究懇話会、2010年11月17日、国文学研究資料館

[図書] (計1件)

①西村慎太郎、吉川弘文館、宮中のシェフ鶴をさばく 江戸時代の朝廷と庖丁道、2012年、223頁

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

西村 慎太郎 (NISHIMURA SHINTARO)

国文学研究資料館・研究部・准教授

研究者番号：90383546

### (2)研究分担者

なし

### (3)連携研究者

なし